草や庭園植物一覧

和名
学名
科名
解説

アオキ

Aucuba japonica Thunb. var. *japonica*

ミズキ科

斑入りアオキなど観賞用として日本の花卉文化に重要な役割を有す観賞低木。樹皮は褐色で，枝は緑色でよく分枝する。葉は大形で，長楕円形で濃緑色，やや肉厚で光沢があり，両面無毛。葉脈はまばらで，乾くと黒くなる。花期は３～５月。晩秋から冬にかけて楕円形の核果をつけ，11 ～４月に赤く熟す。

アセビ

Pieris japonica (Thunb.) D.Don ex G.Don subsp. *japonica*

ツツジ科

常緑中木。基部からよく分枝する。葉は光沢のある厚い革質で，新葉は赤みを帯びる。花期は２～５月。つぼ形の花冠は短紅色～白色で，先端は５浅裂し，雄しべは 10 個。中央には雌しべの花柱が飛び出る。果実は，さく果で平たい球形。花，葉，茎すべて有毒。葉の煎じ汁を殺虫剤や害虫の駆除に使用していた。

アラカシ

Quercus glauca Thunb.

ブナ科

幹は直立または株立ちし，樹皮は暗緑灰色で裂け目は無いが粗い。葉は表は濃い緑で光沢があるが，裏面は灰白色で互生する。花は４～５月ごろに黄褐色の雄の花序を出す。果実はドングリとなる。四国にはアラカシを用いた樫豆腐を作る地方がある。枝を切り詰めて葉を出させる棒樫という垣根に用いられる。

イタドリ

Fallopia japonica (Houtt.) Ronse Decr. var. *japonica*

タデ科

地上部は，土佐の食材として有名。地下部には，ダイオウ（生薬「大黄」）の成分であるアントラキノン類の他に，レスペラドールという色素成分を含みサプリメントとして利用される。しかし，シュウ酸を含みまた使い方を間違うと便秘気味になったりするので注意が必要。

イヌツゲ

Ilex crenata Thunb. var. *crenata*

モチノキ科

有毒。常緑低木～小高木。樹皮は灰黒色。若枝は緑色で，葉は互生し，花期は５～７月，果実は 10 ～ 11 月に黒く熟す。材は割れにくいので印材や器具材，剪定に耐えるので垣根樹，盆栽樹として用いられる。樹皮から鳥もちが採れる。材は高く均質。高価なツゲの代用品として印材，版木などに用いられる。

イヌビワ

Ficus erecta Thunb. var. *erecta*

クワ科

落葉中木。樹皮は灰白色。雄花嚢は赤く熟すが硬くで食べられない。雌木にできる雌花嚢（果嚢）は秋に黒紫色に熟し食べられる。赤黒く熟した実をジャムなどにして，パンなどにぬって食べることが出来る。新芽，若葉は軽く茹でて刻み，スープ，和え物，バター炒めなどにして食べる。

イヌマキ

Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Sweet

マキ科

有毒。常緑高木。日本に広く（関東地方南部以西の本州, 四国, 九州, 南西諸島）分布し，中国・台湾にも生育する。暖地の常緑広葉樹林中に生育し，高さ 20 mを越える。葉は広線形で革質。庭木として利用されている。種子にイヌマキラクトンやナギラクトンなどの毒成分を含有し，食べられない。

イボタノキ

Ligustrum obtusifolium Siebold et Zucc.

モクセイ科

落葉低木。樹皮は灰白色～灰褐色で丸い皮目がある。葉は対生し，葉質は薄い。両面光沢が無く，葉の表面は無毛，裏面は主脈に毛がある場合もある。花期は 5 ～ 6 月，白い小花を多数つける。果実は 10 ～ 12 月に紫黒色に熟す。イボタ蝋を敷居に塗ると，戸や障子のすべりが良くなる。また，家具の艶出しに使う。

イロハモミジ

Acer palmatum Thunb.

カエデ科

落葉中木。樹皮は緑を帯びた淡灰褐色，わずかに縦縞の模様がある。葉は対生し，秋に黄褐色から紅色に紅葉する。葉と共に花柄を出す。果実は長さ約 1.5cm のプロペラ状の翼果で，7 ～ 9 月に熟す。漬けした若葉を天ぷらに用いたり，建築，器具材，庭木，公園樹，盆栽，観賞用として使用する。

ウスギモクセイ

Osmanthus fragrans Lour. var. *aurantiacus*

モクセイ科

別名，ウスキモクセイと云う。中国・インド原産の樹木。ギンモクセイによく似ているが，花の色や葉の形などが 少し異なる。葉は，ヒイラギモクセイには鋸歯があるが，他のものはほとんど全縁で，わずかに鋸歯が残っているものもある。花時は 10 月，薄い黄色。日本では，ウスギモクセイ（雌木）の実を見かけることがある。

ウバメガシ

Quercus phillyreoides A.Gray

ブナ科

常緑中木。葉は互生し，雌花序は，本年枝の上部に 1 ～ 2 個つく。果実は 2cm 前後，褐色の堅果。果柄に 2 個，越冬して翌年の秋に成熟する。落葉が少なく常緑で病気に強く，また切り詰めに耐えることから，街路樹や生垣に利用される。備長炭の原料として，室戸地域や足摺岬に代表される亜熱帯植物の自生地に多く見られる。

ウメ

Armeniaca mume (Siebold et Zucc.) de Vriese

バラ科

落葉中木。樹皮は暗灰色で，葉は互生し，花は葉に先立って 1 ～ 2 月ごろに咲く。果実は 6 月ごろに黄色に熟す。青ウメを梅干しや梅酒，梅肉エキスの材料とする。

オオカメノキ

Viburnum furcatum Blume ex Maxim.

スイカズラ科

大亀の木，別名をムシカリと云う。樹高 2 ～ 4m の落葉樹。葉は枝に対生し，形は円形で葉の先端は尖り縁は全縁になり，形が亀の甲羅に似ていることに本種の名の由来がある。花期は 4 ～ 6 月で，白色の小さな両性花のまわりに大きな 5 枚の花弁を持つ装飾花が縁どる。夏に赤い実をつけ，秋には黒色に熟す。

オクナ・セルラタ

Ochna serrulata

オクナ科

和名はミッキーマウスの木。常緑性低木。アジサイの原種で，7 月ころ大形の集散花序をつける。5 ～ 6 個の直径 0.5 cm の実がなり，熟すと黒に変色する。初夏に実がなり，遅い夏まで赤い萼片が付く花序の姿が，ミッキーマウスの顔に似ていることに，この名の由来がある。花は，蜂や蝶がたくさん集まり，鳥たちは実を好んで食べる。

オモト

Ligustrum obtusifolium Siebold et Zucc.

モクセイ科

有毒（配糖体ローデキシン A，B，C などのステロイド強心配糖体）。常緑多年草。花期は 5 ～ 6 月ころ。全国で観賞用の園芸品種として古くから植栽される。生薬名「万年青根（根を利用）」,「万年青葉（葉を利用）」，万年青花（花を利用）」であり，かいせん，たむしなど外用のみとし，決して服用せず使用についてはかなり注意が必要。

ガクアジサイ

Hydrangea macrophylla (Thunb.) Ser. f. normalis (E.H.Wilson) H.Hara

アジサイ科

落葉低木。アジサイの原種で，7 月ころ大形の集散花序をつける。中央部にある紫色の珊瑚状に見えるものが花で，周辺部にある桃色の 3 ～ 4 弁の花のようにみえるものは萼 (装飾花) であり，この植物の名の由来になっている。結実しないが，内方の多数の両性花は小さく，卵形の果を結ぶ。

カシワ

Quercus dentata Thunb.

ブナ科

落葉高木。柏餅はカシワの葉を用いるが，四国ではサルトリイバラ，ミョウガ，ツバキなどで代用される。褐色に熟した種子は砕いて水にさらし，渋抜きしてから食用する。樹皮と葉は，タンニン，フラボノイド・配糖体クエルチトリンが含まれ，種子は，タンニン，デンプンが含まれることから乾燥した各部位を煎じ，下痢止めに服用。

カニクサ

Lygodium japonicum (Thunb.) Sw.

フサシダ科

シダ植物。つる性で長さ２m近くになる。つるはカニを釣ることが出来るほど丈夫で，かごを編む際の結び目などに使用する。夏から秋にかけて，胞子嚢をつけている葉を採取・陰干しし，完熟した胞子を集め，利尿，排尿痛，消炎解毒，肺炎，急性胃腸炎，黄疸などに用いられる。かつては淋病治療に用いられたこともある。

カラタネオガタマ

Magnolia figo (Lour.) DC.

モクレン科

別名トウオガタマ（唐招霊）。常緑小高木。暖かい地方の神社の境内や庭木などで植えられている。花期は４～６月ころで，バナナのような強い甘い香りがする。葉は長楕円形，厚めで表面に光沢がある。仲間に花びらが反り返るように開くウンナンオガタマ，紅色の花を咲かせるベニバナオガタマ ' ポートワイン ' などが知られてい

カンチク

Chimonobambusa marmorea (Mitford) Makino

イネ科

寒竹は日本原産の竹の一種。稈は黄色または黒紫色で，竹の色は，紫黒色で光沢があり美しく，飾り窓や家具などに使われ，庭など植栽される。タケノコはとても美味で，その味を知る人は少なくない。高知県には，黄地に緑の筋が入るキンメイカンチクが自生し，観賞竹として美しく貴重といえる。

キヅタ

Hedera rhombea (Miq.) Bean

ウコギ科

有毒。常緑のつる性の木本。地表を這ったり，樹木にのぼり，巻き付く。葉は革質で表面には光沢がある。花期は 10 ～ 12 月，果実は黒く熟す。耐陰性が高く，乾燥にも強く，道路の分離帯の植え込みの地被, 壁面の緑化, 室内の緑化などに利用される。品種改良され，多数の品種がある。

キンカン

Citrus japonica Thunb.

ミカン科

常緑低木。刺がなく，葉は広皮針形で。果実は倒卵状長楕円形で，鮮やかな橙黄色で表面には光沢がある。和のう果は５～６個で果皮は苦味と甘味があり，果肉は酸味が強い。 生薬名「金橘（果実)」と云い，せき止め，かぜにキンカンの煮汁を服用する。キンカンとオオバコを乾燥したものを，各５グラムを混ぜて，煎じて服用する。

クスノキ

Cinnamomum camphora (L.) J.Presl

クスノキ科

常緑高木。葉は薄い革質で，円錐状に白黄色の小花を咲かせる。防虫性が高く，材は硬く緻密で，光沢があり，建築材や彫刻材，家具材，器具材などに利用された。樟脳は材，枝，葉を刻み蒸留することで得られる。局所刺激作用，防腐作用があり，防腐剤，強心剤，皮膚病の外用薬の軟膏，擦剤，チンキとして用いられる。

クリスマスローズ

Helleborus niger L.

キンポウゲ科

有毒。鉢植え，庭木として広く植栽される。葉や根茎に強心配糖体のヘレボリン，ヘレボイレ，ヘレブリンが含まれる。ジキタリスと同様の病理作用（中毒症状：嘔吐，激しい痙攣，呼吸麻痺）があるので有毒植物として使用してはならない。花は，ダブル系で花弁の縁が丸い形の品種が高く取引されている。

クロガネモチ

Ilex rotunda Thunb.

モチノキ科

常緑高木。花期は６月ころで。樹皮から「鳥もち」を作り，小鳥を捕ったり，ハエとり紙に利用。夏季に樹皮を剥ぎ取り，２～３ヶ月間水につけて腐らせて，臼（うす）でついて砕き，水で洗って粘り気のあるゴム状の物質を集めたものを「木もち」と呼び，ハエとり紙，あかぎれの軟膏などに利用する。

サンショウ

Zanthoxylum piperitum (L.) DC.

ミカン科

高さ２～４m。葉は強い芳香がある。花期は４～５月，枝先に黄緑色の小さな花を集散花序につける。果実は２～３分果（通常は２分果）で，１０月ころに赤褐色に熟す。 香りの良い新芽や若葉，若い実は食用に，果実は薬用，香辛料とする。若葉は食材として木の芽の名称がある。アゲハチョウ科のチョウの幼虫の食草でもある。

シュウメイギク

Quercus myrsinifolia Blume

キク科

有毒。被子植物。地下茎で増殖する。全体に短毛があってざらつき，茎はあまり分枝せずに直立する。根生葉には長い柄がある。花期は９月，紅色～白色，一重や八重の品種がある。種子はできない。 八重咲きで花弁状の萼が 30 枚ほどある赤花のものが原種。花は咲いても種子は稔らない。高知では珍しい。

シラン

Bletilla striata (Thunb.) Rchb.f.

ラン科

止血剤，排膿，消炎，緩和薬としても用いられ，痔の痛み，切り傷，火傷等の皮膚炎に外用する。

シロバナヤマブキ

Kerria japonica (L.) DC. f. albescens (Makino ex Koidz.) Ohwi

バラ科

落葉低木。樹形は株立ち状になり高さ１～２m。花期は４～５月。庭木や公園などにも植栽される。日本での民間薬として古くから，切り傷の止血剤として用いられていた。乾燥した花を揉んで直接幹部につけるか，乾燥した花に煎茶を約３分の１量を混ぜて，煎じた液で患部を洗う。利尿作用を有す。

ジンチョウゲ

Daphne odora Thunb.

ジンチョウゲ科

有毒。被子植物。樹皮は褐色。葉は花後に枝先に集まって放射状につく。花期は 2 ～ 4 月，前年枝の先に 10 ～ 20 個の紫紅色または白色の花を咲かせ，強い芳香を放つ。6 月ごろに赤く丸い果実をつける。種子繁殖は難しいため，挿し木で増やす。 花の煎じ汁は，歯痛・口内炎などの民間薬として使われる。

スイゼンジナ

Gynura bicolor (Roxb. ex Willd.) DC.

キク科

枝先にアザミに似た黄色またはオレンジ色のマリーゴールドに似た腐臭がある花が咲く。頭状花で種子ができないため，繁殖は挿し芽で行う。表面は濃緑色，裏側は紫色。やわらかい葉を摘んで軽く茹でて灰汁抜きをし，ポン酢をかけたり，お浸し，和え物，汁の実，天ぷら，サラダなどにする。

セイヨウジュウニヒトエ

Ajuga reptans L.

シソ科

多年草のものが多く，立ち上がるものもあるが，匍匐茎を出すものが多い。茎の節ごとに葉がつき，花の基部では縮小して包葉となる場合もある。日本には，同じ仲間のキランソウが自生し，生薬名を「筋骨草：全草利用」と云い，高血圧，鎮咳，去淡，解熱，健胃，そして下痢止めなど民間的に薬用となる。

セキショウ

Acorus gramineus Sol. ex Aiton

ショウブ科

明るい水気のある場所に自生する。蜜柑を冬季保存するとき，セキショウを巻いたり被せたりするので，殺菌や腐敗防止の効果があると思われる。

センダン

Melia azedarach L.

センダン科

有毒。落葉高木。センダン科には有用材が多く，高級材のマホガニーが含まれる。装飾材として家具や桃色系の寄木細工，彫刻材などに利用される。耐火性，耐煙性，耐塩性に強いので，緑化木としてだけでなく，公園樹，街路樹，緑陰樹として植栽される。苦楝子は，整腸，鎮痛薬。苦楝皮は，虫下し，条虫駆除。

センリョウ

Sarcandra glabra (Thunb.) Nakai

センリョウ科

常緑小低木。茎頂に小さな目立たない淡緑色の花をかたまって多数つけ，果実は冬には赤く熟す。庭木などの観賞用，生花などの切花に用いる。果実は外果皮，中果皮を取り除き，陰干し乾燥し，ゴマのように軽く炒って食用にする。抗菌，消炎作用があり，風邪，湿邪，肺炎，虫垂炎，胃腸炎，リウマチ痛に用いる。

ソヨゴ

Ilex pedunculosa Miq.

モチノキ科

常緑小高木。枝は灰褐色で平滑。葉は互生，卵状楕円形。花期は５～６月に，葉腋に雄花は集散花序に数個つき，雌花は単生し，はっきりした柄がある。果実は径 7mm ほどで丸く，秋に赤く熟す。モチノキやクロガネモチのように果実が多数密生することはない。 公園木や庭木として植栽されている。そろばんの珠にも使われる。

ダイオウグミ

Elaeagnus multiflora Thunb. var. *gigantea Araki*

グミ科

落葉小高木。花期は４～５月ころで，淡黄色。果実は６月ころ。ダイオウグミはグミ科の中で特に果実が大きく，ビックリグミとも呼ばれる。鑑賞用兼食用（果実）として栽培されることが多い。

タマスダレ

Zephyranthes candida (Lindl.) Herb.

ヒガンバナ科

葉は細長く，土から直接出る。花期は夏～初秋で一本の花茎に対して，１つつく。葉や鱗茎は有毒で，リコリンというアルカロイド成分が含まれており，誤食すると嘔吐，痙攣の症状をおこす。葉はノビルと間違いやすく注意が必要である。

ツタ

Parthenocissus tricuspidata (Siebold et Zucc.) Planch.

ブドウ科

つる性の落葉性木本。葉は掌状に浅く裂けるか，完全に分かれて複葉になる。まきひげの先端が吸盤状で，基盤に付着する。花は緑色。建物の外壁を覆わせ，装飾として利用される。古来から樹液をアマヅラと呼ばれる甘味料として利用していた。

ツワブキ

Farfugium japonicum (L.) Kitam.

キク科

多年草。葉や若い葉柄をフキと同様に食用にする。葉の開く前の伸びた葉柄を摘み，葉を取り除いたものを灰を入れた熱湯で茹でて水にさらし，灰汁抜きし，煮物，お浸し，佃煮，和え物，天ぷら，粕漬け，塩漬け，カレー煮などにする。 緑の葉を染色に利用できる。

ドウダンツツジ

Enkianthus perulatus (Miq.) C.K.Schneid.

ツツジ科

有毒。落葉低木。秋に紅葉し，葉色が燃えるような真っ赤な美しい色合いになる。花期は４月，釣鐘型や壷形をした小さな白花を下向きに咲かせる。 庭園，庭木，公園樹，ボーダー（生垣）に用いる。

トウバナ

Clinopodium gracile (Benth.) Kuntze

シソ科

多年草。茎は下部で分枝かれして地面をはい，株立ちとなる。茎の先に花序がつき，淡紅色の小花を輪生に数段つける。花の基部につく小苞は線形～線状披針形でごく小さい。中国では，風邪の頭痛，下痢の腸炎などに対して用いた。感冒の頭痛，細菌性下痢，乳腺炎，ねぶと，打撲傷，急性子宮出血に用いる。

トキワサンザシ

Pyracantha coccinea M.Roem.

バラ科

常緑低木。常盤は，常緑であることに因む。東ヨーロッパから西アジアにかけて分布する。1629 年にヨーロッパに紹介され，日本には明治中ころに渡来した。花は 6 月ころに開花し，白色で直径 1cm 程。果実は沢山つき，鮮やかな紅色に熟して美しい。庭木として植栽されるほか，植え込みなどに自然生えして野化している。

トクサ

Equisetum hyemale L.

トクサ科

数本を束ねて，紙やすりのようにしてネイル美容や木工の仕上げの磨きに使う。生薬「木賊（もくぞく）」は，地上部（茎葉）を刈りとり乾燥したもので，無水ケイ酸，胞子にはブドウ糖，果糖，アルギニン，グルタミン酸などが含まれ，腸出血・痔出血，淋疾や水腫，そして下痢止めに，この煎じ汁を用いる。

ドクダミ

Houttuynia cordata Thunb.

ドクダミ科

多年草。白色で細長い円柱状の地下茎で良く繁殖し，群落を形成する。葉質はやわらかで，もむと一種独特の臭いがする。臭みは高熱で消失するので，塩茹でして水にさらして調理したり，天ぷらとして食す。葉を炙る又はもんで化膿，擦り傷，水虫などに外用する。青汁として服用すれば胃痛，十二指腸潰瘍にも効果がある。

トサミズキ

Corylopsis spicata Siebold et Zucc.

マンサク科

落葉低木。幹は灰褐色。葉は互生し，厚質で丈夫。葉脈は 5 ～ 7 主脈が掌状に出て平行に走り，左右不対称。表面に散毛，裏面は葉脈上に軟毛が多く，葉柄には毛が残存。秋に黄葉する。花序は 5 弁花。果実は直径 8 ～ 10mm，球形の蒴果で熟すと 2 裂し，光沢のある黒い種子を出す。 観賞用に栽培，化粧品素材として使用する。

トネリコ

Fraxinus japonica Blume ex K.Koch

モクセイ科

落葉高木。花期は 5 ～ 6 月ころ。樹皮は漢方薬とされ，止瀉薬や結膜炎時の洗浄剤として用いられる。街路樹や園芸樹として利用され，材は弾力性に優れ，バットや建築資材などに使用される。

ナガバヤブソテツ

Cyrtomium devexiscapulae (Koidz.) Ching

オシダ科

庭園などで植栽され，観葉植物としても親しまれている。

ナツツバキ

Stewartia pseudocamellia Maxim.

ツバキ科

別名はシャラノキ。日本では，本植物を紗羅の木と称す。インド仏教の３大聖木は，沙羅双樹，印度菩提樹（イチジクの仲間），無憂樹である。日本には生育していないため, ナツツバキ, ボダイジュ（シナノキ科）を前者２つに見立てた。

ナリヒラダケ

Semiarundinaria fastuosa (Mitford) Makino ex Nakai

イネ科

常緑多年生。葉は葉枝先に４～６枚ずつ付き, 無毛で硬質。稈は細く，節間は長く枝が短い。若竹は緑色だが，冬には次第に紫色を帯びる。観賞用として庭園に植栽される。

ノキシノブ

Lepisorus thunbergianus (Kaulf.) Ching

ウラボシ科

シダ植物。常緑性。根茎は長く横に伸び，樹皮などにまといついて伸びる。葉は根茎から，混み合って出る。葉柄はわら色～茶褐色で短く，基部に線形の汚褐色の鱗片がつく。長期間乾燥すると葉は内側に巻いて細くよれてしまう。胞子嚢群はやや大きな円形で，包膜はなく，下面上半分の中肋と辺縁の中間に並んでつく。

ハクウンボク

Styrax obassia Siebold et Zucc.

エゴノキ科

落葉小高木。葉は倒卵形から広倒卵形。花期は５～６月で，枝先に垂れ下がった，総状花序をだし，白色の花を 20 個ほど下向きにつける。果期は９月ころ。植栽用途として，庭木，公園木とされ，寺院などによく植栽される。また，材は器具材，くり物，ろくろ細工などに利用され，種子からはハクウンボク油をとる。

ヒロハハナヤスリ

Ophioglossum vulgatum L.

ハナヤスリ科

別名，オオハナヤスリ，ハルハナヤスリ，エゾノハナヤスリ。花鑢の名は，文字の通り胞子葉が棒の鑢に似る事に因む。北の地方に多く，温帯に広く分布するが，最近では殆ど観察することが難しくなりつつある種でる。山地の林床や林縁，原野に自生し，「草や」で観られることは，とても貴重なことである。

フキ

Petasites japonicus (Siebold et Zucc.) Maxim.

キク科

多年草。地下茎で広がって繁殖する。葉が出る前に，地下の根茎から，苞葉に包まれたフキノトウと呼ばれる花芽を出す。花は３～５月ころ。雌株には綿毛を持ったそう果ができ，風に乗って繁殖域を拡げる。若葉や葉柄を野菜として，灰汁抜きをきちんとし，皮を剥き，煮物・油いため・各種あえもの・山菜ごはんなどにする。

ヘビノボラズ

Berberis sieboldii Miq.

メギ科

棘に棘が生え２段になっているのが特徴。日本特産の植物で，中部地方以西の本州および九州に分布する。この名は，枝の刺が鋭いので，ヘビも登らないという意味に因む。

ペラルゴニウム

フウロソウ科

和名，蚊蓮草と云い，リモネンなど揮発性の精油を含み，その名の通り蚊除けに用いる。現在，栽培されている品種はアメリカで誕生したものが多く，日本で育種された品種も観られるようになった。一般的にペラルゴニウムの花は，ゼラニウムよりも少し大きくて豪華な花が多い。

ホザキナナカマド

Sorbaria sorbifolia (L.) A.Braun var. *stellipila Maxim*.

バラ科

別名をホザキノナナカマドと云う。落葉広葉低木。穂咲きの名は，全体がナナカマドに似ているものの穂状に花がつくことに因む。同じ仲間に，ニワナナカマドが知られるが，雄シベは花弁と同長か短く，本種との区別点になる。果実は５個に裂開する袋果で短い円柱形，赤褐色に熟し種子を放出する。民家の庭先に植えられる。

ホシダ

Thelypteris acuminata (Houtt.) C.V.Morton

ヒメシダ科

根茎は長く横に這い，鱗片がある。葉身は全体としては広披針形。胞子嚢群は葉裏全体に列をなしてつく。山林の道沿い，人家周辺，田舎の道路わきや，水路の石垣までさまざまなところに育ち，庭園の植栽に利用される。

ホルトノキ

Elaeocarpus zollingeri K.Koch

ホルトノキ科

常緑高木。葉は倒卵形で，古い葉は落ちる前に紅葉し，常に一部の葉が紅葉しているのが見られる。花期は７～８月ころで，釣り鐘状で白い。本州以西の西南日本で照葉樹林の高木層構成樹として重要で，各地の社寺林の中で巨木が見られる。街路樹や公園などで植栽される。

マサキ

Euonymus japonicus Thunb.

ニシキギ科

有毒。常緑低木。今年枝の上部の葉腋から，集散花序をつける。花は黄緑色で小さく，果実は球形で秋に熟す。生長が早く，耐陰性，排気ガスなどの大気汚染や潮風，刈り込みにも比較的強く，密生することから，生け垣や庭木によく用いられる。

マメヅタ

Lemmaphyllum microphyllum C.Presl

ウラボシ科

常緑のシダ植物。石の表面や樹皮上に生育し，細い匍匐茎からまばらに葉をつけるが，密生すると匍匐茎は見えなくなる。葉は肉厚で丸い円形～楕円形の単葉。ときに観賞用に栽培され，ヘゴ材や陶製の鉢緑などに着生させるとよい。中国では咳止めや止血の薬とされる。

マンリョウ

Ardisia crenata Sims

ヤブコウジ科

常緑小低木。根元から新しい幹を出して株立ちとなる。茎は直立し，葉は互生し，厚みと光沢がある。2 年目の枝の途中から小枝を出し，散房花序となり，白色の小花を多数下向きにつける。果実は核果，球形で 11 月ごろ赤く熟す。中国では薬用にされ，解毒の効果があり，扁桃炎，打ち身などに用いられる。

ミヤマヨメナ

Aster savatieri Makino

キク科

別名は，ノシュンギク。他にミヤコワスレの名があり，花変わりとして春の切花など園芸品種として親しまれている。夏から秋に咲くヨメナと区別するために，ミヤマヨメナとつけたという。また，ヨメナとは，鼠菜「夜目菜」で，群生することから，夜に活動する鼠（ねずみ）に食わせ，畑のナスは，鼠に食べさせるなという意味がある。

モッコク

Ternstroemia gymnanthera (Wight et Arn.) Bedd.

モッコク科

被子植物，樹皮は暗灰褐色で細かい斑点が多数散在する。花期は 6 ～ 7 月。花には芳香がある。果実は球形で，10 ～ 11 月に赤く熟して朱色の種子を出す。 材は緻密で堅く，暗紫色を帯びる。床柱や寄席木細工，櫛などに用いられる。八丈島では樹皮を茶褐色の染料にする。

ヤツデ

Fatsia japonica (Thunb.) Decne. et Planch.

ウコギ科

有毒。常緑低木。葉が大型で独特の形をしており，見分けやすい。花は晩秋に咲き，球状の散形花序が集まって大きな円錐花序をつくる。丈夫なので庭木として植栽する。葉を乾燥させたものは八角金盤と呼ばれる生薬になり，去痰などの薬として用いられる。しかし，過剰摂取すると下痢や嘔吐，溶血を起こす。

ヤブカンゾウ

Hemerocallis fulva L. var. *kwanso Regel*

ユリ科

多年草。山野草として栽培，庭園に植栽し観賞する。つぼみ，開花後の花は中国料理で金針菜の名で利用され，若葉は軽く茹で，天ぷら，お浸し，和え物，酢物，炒め物，汁の実などにされるやわらかい葉や新芽には血管の成熟化・正常化などの作用を有し，しわ防止・改善剤及びむくみ改善・予防を目的に美容食品として食する。

ヤブミョウガ

Pollia japonica Thunb.

ツユクサ科

多年草。5 月ころから発芽し，夏にかけてミョウガに似た長楕円形の葉を互生させる。花期は 8 月ころで，白い花を咲かせる。実は初秋にかけて球状の実を付ける。種子のほか，地下茎を伸ばしても殖え，群生する。

ヤマアジサイ

Hydrangea serrata (Thunb.) Ser. var. *serrata*

アジサイ科

落葉低木。樹皮は灰褐色。葉は対生し楕円形または長楕円形。枝先に集散花序を出し，両性花の周りに装飾花がつく。花色は薄い紅色から白色や紫色，青色のものなど多様である。果実は長さ 3 ～ 4mm で，卵形～楕円形の蒴果である。山野草として栽培，観賞用にされる。薬用植物のアマチャ (天茶）の代用にはならない。

ヤマブキ

Kerria japonica (L.) DC.

バラ科

ヤマブキの葉は互生，シロヤマブキは対生。落葉低木。晩春に明るい黄色の花を多数つける。古くから親しまれた花で，庭に栽培される。花は一重のものと八重のものがあり，特に八重咲き品種（*K. japonica* f. *plena*）が好まれる傾向がある。一重のものの花弁は，通常 5 枚。

ヤマボウシ

Cornus kousa Buerger ex Hance subsp. *kousa*

ミズキ科

落葉高木。樹皮は暗朱褐色。葉は広楕円形または広卵状楕円形。秋に紅葉し，葉の展開後に開花する。果実は球形の石果，8 ～ 10 月に成熟する。花，果実，紅葉と 3 回楽しめるので，街路樹，庭園樹，公園樹としても用いられる。材は堅く強靭なため，農具や工具の柄，木槌，杵などに利用される。果肉は粘質で甘く，食べられる。

ヤマモモ

Morella rubra Lour.

ヤマモモ科

常緑高木。中国では果樹として栽培され，日本では果実酒，シロップ，砂糖漬，塩漬，ジャム，ゼリーなどに利用。漁網を染める染料（黒～褐色）で大島紬，黄八丈に利用される。材は堅く器具材，燃材として利用される。根粒菌による窒素固定を行う肥料木，大気汚染等に強い緑化樹，公園や街路樹として多くの所で植栽されている。

ユキヤナギ

Spiraea thunbergii Siebold ex Blume

バラ科

落葉低木。地面の際から枝がいく本にも枝垂れて，細く，ぎざぎざのある葉をつける。花は，３～５月にかけて，雪白の小さなものを枝全体につける。自生種は石川県で絶滅危惧Ⅰ類に指定されているなど，地域的には絶滅が危惧されている。公園や庭先で植栽される。

シチヘンゲ

Lantana camara

ハナヤスリ科

別名，ランタナ。常緑小低木。茎は断面が四角で細かいとげが密生し，葉は表面がざらついている。多数の小花からなる散形花序をつける。開花後，時間がたつと次第に花色が変わるため，同一花序でも外側と内側では花色が異なる。果実は黒い液果で有毒といわれるが，鳥が食べ種子を散布する。花はお茶などに利用できる。

レース・ラベンダー

Lavandula multifida

シソ科

常緑低木。３～１２月に，青い花が咲かせる。普通のラベンダーと違い夏に花がたくさん咲き，また非常に育てやすいです。沢山枝が出て露地植え 高さ 50cm 以上 になる時がある。葉のみならず花も食用とされ，主にポプリ，ハーブティー，アロマセラピー，そして観賞用などに利用される。

MEMO

MEMO

MEMO

MEMO